

都市の風景に関する研究

(第4回)

* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事
渡辺 直行

はじめに

前回街づくりに関して「物語を語る」と書いたところ、「街はそのような情緒的なものではない」、「都市はもっと硬いものだ」、「そもそも研究に物語は無縁だ」、「物語を騙るな」等々の言葉が各方面から聞こえてきたような気がしたが、それはどうやら筆者自身の脳が言っていたらしく、つまりノーと言える声なので、今回は「物語」を正面に据えてさらに脳を使ってみることにした。そもそも研究とは何か、研究と物語との関係は何か、物語とは何か、街と物語との関係は何か、街づくりにおける物語の意義は何か、といったようなことが今回の内容である。それらを前回よりも硬く考えていきたいのであるが、筆者の脳は最近何か硬くないので、今回は有識者の先生方の文献のお世話になりつつ文章を固めていきたい。

1. 研究とは何か

(1) 研究の意味

そもそも研究とは何だろうか。国語辞典の定義をいくつか見てみよう。

よく調べて真理をきわめること(広辞苑)
物事について深く考えたり調べたりして真理を明らかにすること(大辞林)

よく考えたり、詳しく調べたりして、真理を明らかにすること(言泉)

よく調べ、真理をおしきわめること(新辞源)

物事を学問的に調べ考えて、真実を探ること(広辞林)

物事を深く考えたり、詳しく調べたりして、真理を明らかにすること(小学館国語大辞典)

物事の内容や原因、結果、状態などを学問的に深く考え、調べて明らかにすること(日本語新辞典)

問題となる事柄について、学問的に深く調べ考えて、その状態・内容などを明らかにすること(学研国語大辞典)

物事を詳しく調べたり、深く考えたりして、事実や真理などを明らかにすること(大辞泉)

問題になる事柄についてよく調べて事実を明らかにしたり、理論を打ち立てたりすること(新明解国語辞典)

よく調べて事実や道理を深く知ること(三省堂国語辞典)

これら 11 例のうち、～ は「真理」を探ること、明らかにすること、あるいはきわめることを研究とする。、 は「物事の内容や原

因、結果、状態」等とやや具体的に記述する。

～ は「真理」「理論」「道理」と「事実」とを並列にする。

「真理」を探る方法としては「調べること」「考えること」の2つを掲げるものが7例ある。「調べる」ことのみ掲げるものは4例ある。

「調べること」「考えること」のやり方としては、「学問的に」あるいは「理論を打ち立てる」とするものが4例ある。「よく」「深く」「詳しく」とだけするものが10例ある。

以上を多数派中心にまとめると、「研究」とは、物事を深く調べ考えて「真理」を見出そうとすることである。その手段としてはとりあえず学問、理論ということになる。「事実」は「真理」と同時に確定されるものと考えれば、それまでは不変の事実というものはなく、あるのは仮の「事実」であり、「事実」自体が調べ考えるべき対象になる。つまり全てが疑いの対象になる。

「研究」をこのように整理すると、「研究者」であるための必要条件は次の2つである。

真理を見出そうとする不遜で謙虚な姿勢があること

全てを疑う広い心があること

学問的能力や理論的センスなどは附随的なものであって、はっきり言ってどうでもいい、と個人的には思いたい。真理とは決して到達できないが到達したいと思う深遠なものなので、それを追い求めることを目的とする研究では結果ではなくプロセスが大事であり（つまり終わりはない）、能力やセンスの差などは真理までの距離から見ればないに等しい、と個人的には信じたい。もちろん世間の評価は別である。しかし、 の要件を満た

す研究者はそんなことには関心がない、と個人的には言いたいところだが、「私にも生活というものがある」という寅さんのようなつらさは研究者にもある。

世の中の現象に不思議を感じ、その背後にあるものを知りたいと思う気持ちが生まれ、何か考え始めれば、その瞬間から研究者である。いくら技術や制度に詳しくても現象や哲学に関心がなければ研究者ではない。実利的、実践的なものこそが研究であると公言して憚らない人もいるが、その発想が根本から間違っていることは政策研究においても同じである。社会学の父(のひとり)と言われるデュルケムは、「社会科学は、従来あまりにしばしば陥ってきた実利的比較から断乎として訣別しなければならない」(デュルケム『社会分業論(下)』井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、1989年)と述べている。実利への関心は二義的なものである。研究の目的はあくまでも真理の探究であるから、「政策を良くしたい」という気持ちもたぶん邪念であろう。真理は政策の遥か彼方にある。そちらから照り返してこそ政策も良くなる。観察すべきは天空であって反射望遠鏡のミラーではない。実利ばかり見ていると実利のための実利になってしまう。

(2) 事実の意味

真理に至るまでは事実は未確定である、というのはわかりにくいかもしれないが、普通事実と思われているのは脳が言う事実でありノートと言える事実である。それは「あった」事実であり真理は「ある」事実である。

事実は過去に関する創作である。「人間が生まれる前から地球があったのは動かぬ事実である」というのは動く事実である。裁き

は「普遍的事実」ではなく「辻褃の合う作った事実」に基づく。「私の中で今も聞こえる」声は幻聴である。

人間にとっての事実とは単なるデータや事例の集積ではない。それらに解釈が加わって初めて事実になる。その点は歴史と同じである。データや事例の収集ばかり延々と行なう者は「理想的年代記」の作成を目指すような者で、それは「研究者」の行為ではなくたぶん「おたく」の行為である。その結果、膨大なデータ集や事例集ができあがっても、それ自体は何の意味もない。数字や文字の間にストーリーを見出せない者にとっては、それらは存在しないのと同じである。その点はデュルケムの次の指摘のとおりである。

科学の到来を準備する最上のやり方が、初めその利用すべきすべての材料を苦心して集めることだと信じられるならば、それは当てがはずれるであろう。なぜなら、科学がすでに自らを、そして自らの欲求を、何らか自覚して始めて、換言すれば、科学が存在して始めて、科学が必要としている材料が何であるかがわかるからである。(デュルケム前掲書)

以上は極めて当たり前のことだと思うのだが、同意を得ることはなかなか難しい。例えば、経済グラフは単なる事実だから「赤の他人」が加工したものでもクレジットなしで使ってかまわない、と主張する人が昔はいたりしたが、こうなると研究の議論は不毛である。共有財産となった事実(例えば昨年の経済成長率)は誰が使おうと自由であろうが、それは持ち主のない事実だから自由に使えるのではなく、共有する制度があるから自由に使えるのである。

「誰が見ても」事実と思うことも作られた事実である。それは作られた事実を関係者が共有しているだけである。例えばA氏の顔を見ていた10人が「A氏は笑った」と言っても、それは10人の脳が創作したことを10人の脳が共有しているだけであって、客観的、普遍的な事実ではない。A氏はくしゃみを我慢していたのかもしれない。事実は創作物である。

(3) 真理の意味

真理とは、いろいろな事実を矛盾なく説明できる、事実の背後にある原理である。もちろんこれも創作物である。しかし簡単には創作できない。制度や事例など個々の事実をたくさん集めるようなことを延々と行なっても、真理には到達しない。事実をつなぐものがなければ真理にならない。この点は物語と同じである。

学問は創作の道具である。しかし真理の大きさに照らせばあまり大きな道具ではない。そのため学問は自分の身の丈に合うように扱う真理の範囲を狭めてしまう。それでもうまく理論が出てこないのも、今度は自分の方を分裂させてそれぞれが扱う真理をさらに小さなものにしてしまう。こうして学問が「発展」してきた。依然として大きな真理を追究しようとした学問はその裏で衰退してきた。

学問が分裂する前は、それが追究する真理は物語と密接不可分のものであった。ところが、学問が細分化されてくると、それらが扱う真理は物語ではなく技術や制度といった細々とした実利的なものになってきた。それらの実利的「真理」を追究することこそが「発展」という「大きな物語」に貢献するものだと暗黙のうちに了解されるようになってしまっ

た。これはもちろん幻想である。

細分化された学問はそれぞれの分野で大きな成果をあげ、人間の欲を満たすことに少なからぬ貢献をしてきたが、その一方で全体を見る視点は希薄になった。実利に直結するものに大きな関心が集まった結果、世界観は経済観、政治観、技術観、制度観などになってしまった。

世界が単線的に「発展」していた間はいまだよかったが、それぞれの学問が自分の目の前に設定した「真理」を追究するうちに世界全体が変になってきた。問題が相互に絡み合っただけで複雑になってくると、縦割りの高い壁で相互に遮られたそれぞれの学問では「真理」がわからなくなり、学際研究なるものも盛んに行なわれるようにはなったものの、例えば地球の破壊や社会の破壊、人間の破壊といった最も深刻で重要な問題に関してすら有効で説得力のある理論を見出すことができなくなった。

このような傾向は都市の分野においても著しい。例えばある学問では都市に警告を発したのに、他の学問では相変わらず都市集中を是とした。もちろんそれぞれは有用な視点を内包しているが、それぞれの「理論」はおそらく相互に何の意思疎通もなく、それぞれの縦割りの高い壁の内側だけ見て並存してきた。そして、現実には分裂症的な現象が発生し激化した。人の命を削りつつ膨張する制御不能な怪物のような面が都市にあるとするならば、それを深く考察することこそが重要であるはずである。

気候の真実、経済の真実、社会の真実、工学の真実、
の真実、
の真実、××の真実、……学問がそれぞれ自らの土俵を決めてしまい、それを超えて真理を追求

しようとする研究の志を失ってしまえば、真理そのものが視野から消えてしまう。結果、対症療法しかできなくなってしまう。

今のところ近代の学問は世界全体の認識に関しては無効であるように思われる。例えば「美しい」ということがわからなくなる。ヨーロッパでは、美しい都市をつくっているのは近代の学問ではなく前近代から続く住民の意志である。近代の都市計画は道具としては有用であるが、どんなに工夫しても道具の中から原理的に「美しい」都市をつくる力が出てくるわけではない。

「大きな物語」が失われてみると、それを前提とした近代の学問が誠に空虚なものに見えてくる。真理を追究する気持ちが縦割りの壁で簡単に跳ね返されてしまうような学問における真理は、大きな真理へのステップになるわけがない、という極めて当たり前のことが見えるようになってきた。その空虚さを隠すためか、さらに自らの視野を狭めて細々とした事実へのめり込むものや、ひたすら現実的な利益を「学問」として追い求めるものが出てきたが、それらは有用であるかもしれないものの、真理を追究する観点からはなお一層空虚なものに見える。

最近に至って、ようやくこの空しさに学問も気づきはじめたように思われる。表面的なテクニックではない、思想面も含めた大きな学問の重要性が再認識されるようになり、哲学、文学、美学、社会学等に復調の兆しも見られるようになってきた、というのはもちろん筆者が見る「事実」である。

(4) 研究と物語

以上まとめると、研究とはさまざまな事実を矛盾なく組み合わせてその背後にある真理

を見出すためのものである。それはこの世のさまざまな謎を矛盾なく説明できるように組み立てられる物語である。最近はあまり見なくなったが、例えば前世紀の優れた研究が推理小説よりはるかに面白いのは、真理探究の物語が感じられるためであると思われる。

さて、研究が物語であったとしても、その物語は勝手気儘に書けるものではない。あくまで真理を探究するための物語であるから、あれは見なかったことにしよう、最初から都合のいいこの部分だけ見ることにはしよう、いくつかのシミュレーションの中から都合のいいものだけ発表しようなどというのは、研究ではない。都合の悪い事実、思惑通りにならなかった事実にこそ注目しなければならない。したがって研究者には自己否定の精神が要求される。都合の悪いことから目を逸らす人、都合の悪いことを言う人を攻撃する人は、真理を探究する態度から最も遠いところに位置し、そのような人が社会を衰亡させていく。真の研究は個人や集団における自己否定の自由があるところに成立する。それは社会の健全性の指標でもある。したがって世間や集団に迎合する研究者や研究機関の増加は社会衰退の証拠である。社会が衰えれば現実を直視する研究の物語は貧しくなり、現実から逃避する架空の物語が盛んになる。

このように言うと、また事実に関する議論に逆戻りしてしまうことがある。現実を直視することは事実を客観的に見ることではないか、物語は主観的なものだから客観的な事実に基づく研究とは正反対のものではないか、等の議論である。このような議論の背後には、事実を計量的に分析するのが研究であるという「近代」の考え方が多少なりとも働いてい

る。しかし計量は間主観化(脳の共有)のための一つ的手段にすぎない。

物語の主観が間主観であることを考えれば、研究との共通性がわかる。物語は皆が共感するからこそ成り立ち、伝達され、永続性を持つ。そこに織り込まれている事実と哲学とは主観的なものかもしれないが、それは皆で共有される主観である。一方、研究の基礎となる事実、哲学も皆で共有されることが大前提である。事実にも哲学にも関心がない人はそもそも研究に関心がない人だから、その人にとっては研究は存在しない。これは物語の場合と同じである。

研究が物語であることは統計手法をみてもわかる。統計手法は物語が否定される可能性をチェックするものであって、唯一の真実を明らかにするものではない。つまり推理小説のあらさがしのような手法である。したがって「客観的」「計量的」手法と思われるものでも物語と無縁ではない。例えば費用便益分析でよく使われるヘドニック分析には研究者の良心の物語がおおきく反映されるし、CVMは一般の人々の物語そのものである。そこにおける計量された「事実」は人々が信じる物語である。

真理とは物語である。研究とは物語をすることである。その物語は近代の過程でどんどん空虚でスケールの小さな「大きな物語」になってしまった。その終焉がおよそ1970年代中頃であったとすれば、そして、その後の物語が依然として不透明であるとするれば、物語が「失われた30年」が今も更新されている。

2. 物語とは何か

(1) 物語の意味

前項までは「物語」を定義せずに用いてきたが、そもそも「物語」とは何だろうか。ここではそれを考えてみたい。とは言っても筆者には独自の文学論を展開する脳はないので、いきなり有識者の文献を引用してしまう。少し長い引用になるが、藤井貞和『物語の起源』(ちくま新書、1997年)には次のように記述されている。

カトリ、カタルという語は、上代以来、日本語の歴史のうえにまさに頻出する。(中略)その意味内容をまとめると、(a)出来事を報知する(非現場性を特徴とする)、(b)熱心に問いかけ、説得し、慫慂して、相手を動かす、という二側面が「語る」にはこもる。(中略)

カタルとは、説話ないし言いあらわしたい事柄や思想について、言語行為としてその話題の全体像に立ち向かい、まさに表現へと積み上げてゆくさまを意味する。固定してしまっている表現を一音一音、あるいは一字一字たどりながら声に仕立ててゆく行為に就いてはヨム、というはっきりした意味の区別があった。語部は古代の表現をこととする者として、その両者にかかわり、職務としては説話を管理し、叙事に従うまごうことなきカタリの徒でありつつ、フルコト(=古詞)としてある詞章は、それをカタルことができない以上、一音一音を追ってヨムことをする。(中略)

カトリとモノガトリとのあいだにはどのような差異があるのか。(中略)折口信夫の、ものとは、霊(モノ)の義である(中略)というような意見は、今日たいへん有名になって、いわば俗受けしつつ、広く評論にまで参照され、一人歩きして、想像をたくましくさせるところの“折口学説”

の一つとなっている。(中略)モノに、ある段階で靈的存在をあらわす意味があることはみとめられる。(中略)(しかし、)えたいの知れない、名づけようのないしろものだからモノだというので、しかもそれをさして言うことをはばかられる存在であるとする、一般的、抽象的にモノと呼ぶほかない。(中略)「もの」自体はあくまで存在一般を漠然とさしあらわすための抽象度の強い語としてある。(中略)

モノは、存在を漠然と、一般的に、非限定的に指示する便利な語として、上代の世界に息づいている。(中略)モノガトリのモノは、この語のもつ、存在を一般的に、非限定的に指示する機能のなかにその意味内容を第一に求められなければならない。(中略)カトリではあるが、何でもの、あるいは何でもに就いての、さまざまなカトリがモノガトリであった。(中略)

モノガトリはカトリをなかに含むから、情熱的な語りの要素を失っていない。それとともに、モノガトリであるからには、カトリではない、という積極性が感得される。カトリではない、モノガトリなのだ、という。正統的な、たとえば語部がもち伝えるような、堅苦しい、というべきか、固定的な詞章と化することもありうる、そういう言語的な伝承があるとすると、それに対して何でもの話題を、少々あるいは大いにくだけて、しかも情熱をこめて語る、という感じがモノガトリにはあろう。(中略)

モノガトリは、正統的な言語の伝承に対して、パロディ(=模擬)としての位置を占めるかと思う。だからモノガトリは正統的な言語の伝承に対して自由であるとともに、かつかならずしも自由ではない。つまり、正統的な言語活動の制約に対しては、モノガトリであるからどのように語ろうと自由であり、雑談、会話、さらには恋愛の語らいのごときとりとめないものをそのように

称してはばからないのは、モノガタリ^{モノガタリ}の自由性によるのではないかと思う。その一方に、神話や歴史叙述のような正統的な言語活動に対する、パロディらしさの性格を有しているとする、話型や語り方にいたるまで、ある種の形式性を見せて、語りの作品らしさを演じることになるから、全面的に自由ではなくなる。

叙べてきたフルコトが正統的な言語の伝承として、堅苦しく、場合によっては固定的な詞章と化していったり、さらには断片的な言語と化していったりするのに対して、モノガタリは自由な語りの領域を確保しようとする言語活動だ、というふうにまとめられるかと思う。(中略)あらぬ、正式ではない、はっきりしないカタリはモノガタリであるとすると、幼児の言葉の練習も、無秩序な自然の発声現象も、モノガタリというのでよく、併せて巫者のカタリもモノガタリという語にふさわしいかと考えられてくる。

物語とは、専門家だけがするものではなく、多くの人々が草の根的にするものである。そこには何よりもまず物語る自由がある。しかしその一方で歴史の中で積み上げられてきた伝統的手法を芯に持つという一定のルールがある。ルールを芯に持ちつつそこから自由にゆらぐのが物語である。物語のこの性質は自由そのものの性質と極めて似ていることが高坂正堯『文明が衰亡するとき』(新潮社、1981年)の次の記述でよくわかる。

リベラリズムは一見なまくらに見えるが、強いしんがなければ存立しえないものなのである。そのことはリベラルという言葉を考えても判るだろう。「自由な」という訳語では、リベラルという言葉のニュアンスはつくされえない。リベラルな翻訳とは、自由奔放で雰囲気の出た翻訳と

いったところである。カネの面でもリベラルという鷹揚でけちではないといった意味である。それは決して悪い意味ではない。だが、自由奔放に雰囲気を出しながら、でたらめとはちがう訳をすることは難しい。それ自身難しいだけでなく、極度に謹厳な人間からは非難されよう。カネの使い方についても同じで、鷹揚ではあるが乱費家でないことは難しい。しかも石部金吉氏からは非難される。つまり、リベラルな立場というものは、自制心と強い自信とがなくては保持できないものなのである。

これを逆に読めば、他人を攻撃し他人の自由を抑え込もうとする人は「自制心」と「強い自信」とを持ち合わせていない人であると言える。それは、他人の自由を奪うことによってのみ自分のアイデンティティを保つことができる人である。

さて、物語が上記のようなものだとなれば、そこには明らかな起源はなく、また完成もない。したがって特定の作者もいない。あるのは不特定多数の人々による終わりのないプロセスだけである。もちろんそれら全体をうまく体系化するコーディネーターのような人が出てくることはある。このプロセスの様子は、伊藤整『改訂 文学入門』(講談社文芸文庫、2004年)の次の記述でよく理解できる。

物語の各部分がそれぞれの体験者や、体験者の弟子たちに口伝えに伝えられてゆくうちに、一つ一つのエピソード(小話または挿話)が、しだいに磨きあげられて変ってゆく。不要のところは削られ、おもしろい話が付け加えられて、作品としてだんだん完備したものになってゆく。(中略)

各地方に分散した語り手によって、小部分

ずつ、しだいに芸術作品として、立派なものになる。すなわちよくできた短編小説のようなものが、各地にいくつもできる。

そうすると、ある時、一人の天才的な人間が出てきて、それらの作品全体を集めて一つの大きな物語りにしたならば、もっとおもしろいものになる、ということに気がつく。(中略)

そういうような経験を何度かへて、物語りがしだいに部分において完備したものでありながら、それらの部分が互に連絡のある話になり、全体として一つの構造体を形成するようになる。(中略)

そのようなことをなし得る人、たとえばシェークスピアとか紫式部というような人は、学問や知識において優れているだけではたりない。人生とはどのようなものであるか、という自分の考え、すなわち、はっきりした思想を持っている人である。その思想がはっきりしていれば、全体の構造がその結果として一貫した生命のあるものとなるのである。一度修正された後でも、それは、さらに後代の人間によって書き加えられたり、修正されたりする。けれども、このような作者が作品をまとめた後では、その作品の思想という骨格を変えることができないから、そこで作品というものが確立する。

ここで印象的なのは、物語の作者と思われる人がとりまとめたものは、既にそこにあつたものだということである。また、そのようなとりまとめができる人は「学問や知識」があるだけでは駄目で「人生とは何であるか」というような考えがなければならぬということである。近代の学問がなかなか物語にならず、したがって真理を追究する研究にならないのは、研究が人生の素朴な疑問から発するものではなく職業から発するものであるか

らかもしれない。縦割りの学問の壁を越えることができないのも、そのあたりに原因があるのであろう。

最後に物語の要件を整理しておく、次のようなひとつのまとめをすることができる。

草の根的に人と人との間に(あるいは草木の間からも)生まれること(官製ではなく民(たみ)製、自然製)

何についてでも話すことができる日常の開かれた語りであること

単なるおしゃべりではなく情熱を持って人に語りとうとする内容があること

固着しておらず変化するゆらぎがあること(テキストで教条化されていない)

人々が語り継ぐこと(外から強制されるものではなく主体的に作るものであること)

受け継がれたものを大切に扱う等一定のルールを尊重すること

(2) 横断面としての物語(小さな物語)

以上のような要件を満たす物語がなくなると学問の壁が越えがたくなるように思われる。学問の壁が越えられない理由は、視野が狭いこと、及び、それと一見矛盾するようだが、視点が高いこと、である。つまり高い壁を設けておきながら、それを下から見上げるのではなく上から覗き込むものだから、高い壁の存在に気がつかない。近代の「大きな物語」とは結局そういうものであつた。それが「発展」とか「進歩」とか言うとき、その視野には宇宙は入っていない。地球すら入っていない。自然も入っておらず人間以外の生物も入っていない。場合によっては毎日餓死する南の国の人々も入っていない。足元の風土ですら入っていない。それで「発展」「進

歩」すればするほどおかしくなる。しかしそれがなかなかわからない。それは地面の上で生きる生活者の視点ではなく上から壁の中だけ顕微鏡で見下ろす実験者の視点になってしまっているからである。「進歩」の意義についてはデュルケムも次のように疑問視している。

個人の幸福は人間の進歩と共に増加するであろうか。これほど疑わしいものはない。確かに、今日われわれだけに与えられていて、より単純な性質をもつ人々には知られていない多くの快樂がある。だが、その代りに彼らには免除されている多くの苦痛にわれわれはさらされているのである。そして、その差引勘定がわれわれの利益になっているかという、それはすこしも確実なことではない。(中略)非常に活動的な生活によってえられる快を未開人は知らないとしても、その代り彼は文明人の苦痛である倦怠感を感じることはない。未開人は、生活の極めて短い瞬間瞬間を多数のそして焦眉の急を要する諸事実をもって充たしたいという欲求を永久に経験することなく、その生活を心楽しく送るのである。なお、忘れられてはならないことは、労働がいまだに多くの人々にとっては、苦痛であり重荷にすぎないと感じられていることである。(デュルケム前掲書)

未開人の生活実態に関しては分かりかねるところもあるが、アマルティア・セン『自由と経済開発』の次の記述を見れば、「発展」「進歩」の形によってはむしろ未開の方が「幸福」である場合があることがわかる。

アメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人は、白人のアメリカ人よりも総体的に貧しいが、第三

世界の人々よりずっと富裕であるとよく言われる。しかし、アフリカ系アメリカ人は多くの第三世界の社会(中略)の人々に比べ、成熟した中高年まで生きる可能性が絶対的に低いということを知ることが重要である。もし開発に関する分析が豊かな国にとっても意味があるとすれば(中略)、豊かな国の内部でグループ間に目立った差異が存在することは、開発と低開発の理解にとって重要な側面と見ることができる。

(アマルティア・セン『自由と経済開発』

石塚雅彦訳、日本経済新聞社、2000年)

センは「開発とは人々が享受するさまざまな本質的自由を増大させるプロセスである」あるいは「開発とは相互に関連する本質的自由が一体となって拡大していくことである」と述べているが、もし「発展」「進歩」に意義があるとすれば、それは「開発」による「自由」の拡大にあるのかもしれない。そのような視点で見れば、「発展」「進歩」はマクロの数値や経済の効率性、生産性で見るとはなく、人々の中の自由、平等の度合いで見るときではないかと思われる。

しかしいづれにしても、「発展」「進歩」という言葉は「青雲の志」などには興味がなく毎日を単純に平和に暮らしたいと思う多くの人々が自発的に物語る言葉ではない。それは上から人々に被せられた「神話」である。もちろん「神話」にも人々の生活の中から生まれた物語が含まれることがあるが、それが硬直化して上から被せられるときには、そこに自由はなく強制だけがある。それは20世紀の歴史を見ればよくわかる。柳田國男はそのような中で物語を復活させようとしたわけだが、野家啓一『物語の哲学』(岩波現代文

庫、2005年)はその意義を次のように記述している。

柳田國男が「口承の文学」にその正当な地位を復権せしめようと志したとき、彼の眼前にあったのは、近代的自我にも市民社会にも裏打ちされることのない矮小化された「真実」の横行であった。(中略)

「紙と文字」を媒体にして密室の中で生産され消費されるのが近代小説であるとするれば、物語は炉端や宴などの公共の空間で語り伝えられ、また享受される。小説(novel)が常に「新しさ」と「独創性」とを追求するとするれば、物語の本質はむしろ聞き古されたこと、すなわち「伝聞」と「反復性」の中にこそある。独創性(originality)がその起源(origin)を「作者」の中に特定せずにはおかないのに対し、物語においては「起源の不在」こそがその特質にほかならない。(中略)物語の享受は聴き手や読者の想像力を梃子にした「ずれ」や「ゆらぎ」を無限に増殖させつつ進行するのである。それゆえ、物語の理解には「正解」も「誤解」もありえない。そして「作者の不在」こそが物語の基本前提である以上、それは反独創性、無名性、匿名性をその特徴とせざるをえないであろう。(中略)

「作者」がいなければ、「作品」概念もまた、その特徴的意味を失うであろう。物語は「作品」となることを欲しない。つまり、それはいかなる意味でも「完成への意志」をもたないのである。それゆえ、物語のもう一つの特徴は「テロスの不在」にあると言うべきであろう。リゾーム状の物語生成は、それが到達すべき目標を始めから欠いているのである。(中略)物語のもつこのような「起源とテロスの二重の不在」という特質は、「作者の意図(起源)」と「作品の完成(テロス)」とを両極として形成されてきた近代

小説の概念とは真っ向から対立するものであろう。さらに言えば、それは近代小説のみならず、「近代」そのものの理念に対しても、真っ向から背馳するものと言えるであろう。(中略)

おそらく、「起源とテロスの二重の不在」というマイナスの手札を逆手に取り、それを積極的価値として肯定することこそ、波打ち際を浸食しつつあった「西欧近代」に対して柳田國男が敷設した防御線であり、また抵抗の戦略であった。西欧近代は「起源」と「テロス」とを結び直線的時間の中に自らを位置づける歴史意識を座標軸に、絶えざる「進歩」を追い求め、「完成への意志」に貫かれたファウスト的人間像をその理念として掲げてきた。それは過去の伝統的権威を否定して「前へ」進もうとする啓蒙の運動であり、その運動は到達目標としての「テロス」に照らして現在を正当化しようとする歴史哲学をその推進力として持っていた。リオータルならば、そのような自己正当化のための歴史哲学を「メタ物語」ないしは「大きな物語」と呼ぶことであろう。乱暴な言い方を承知で言えば、柳田はその「大きな物語」に席捲されつつあった近代日本のただ中に佇立し、それと対峙してその虚妄性を暴き出すためにこそ、口承言語によって語り伝えられてきた「小さな物語」という根拠地に立て籠もったのである。

「大きな物語」が失われた今日でも過去の「大きな物語」復活にこだわったり、別の「大きな物語」を見出そうとしたり、あるいは単に「大きな物語」を否定することだけに熱心であったりする議論が依然として数多く見られるが、それらの視点はすべて「ブルクハルト言うところの「縦断面」である。

私たちはいわゆる「世界史的理念」などは何ら要求するものではない。むしろ私たちの眼で見たもので満足し、歴史を通じての横断面(Querdurchschnitte)を、しかも出来るかぎり多くの方向において与えようとするのである。(中略)さて従来の歴史哲学の特質について言えば、それは歴史の後を追ひ、その縦断面(Längendurchschnitte)を与えてきた。つまりそれは年代を逐う(chronologisch)行き方をしてきたのである。このようにしてそれは世界の発展の普遍的なプログラムに迫ろうとし、それも概してこの上なく楽観的な意味で試みてきたのである。(野家前掲書)

この「縦断面」の視点は明治以降の政策や学問にそのまま当てはまる。それらは西高東低の実利主義に陥り、「発展」「進歩」の名の下、日本の風土の下での人間というものを度外視してきた。伊藤前掲書は次のように記述している。

明治維新から後に作られた日本の近代社会なるものは、官吏や学識者を中心にしたもので、主として、技術的な部面においてのみ文明を取り入れたのであった。日本人は自由な研究をしたり、近代的な産業を営んだり、ヨーロッパの芸術を取り入れたり、また軍事組織を作り直したりした。そして人間性についての考えは古いままであった。それが日本の近代の一つの特徴であった。(中略)

明治の末年に近くなり、基礎は封建意識で、表面のみ近代風な社会の秩序が固定してくると、(中略)社会を改革する運動は(中略)手ひどい弾圧を受けて、ほとんど絶望的であった。だから自分を生かし、(中略)ある一つの仕事を人に負けずに成しとげるためには、他人に

たいして非人間的なことをしなければならない。(中略)しかしその本質においては、生命というものは、自分の立場を押し広げて自分の十分な満足を得ようとすると、直ぐ自分の隣にいる肉親の生命をすら残酷にあつかわなければならない、というエゴの残忍さに、近代人が近づいて来た、ということを示している。

この「近代」を克服することが「大きな物語」が失われて久しい今日においても依然として物語の課題であり学問の課題であり政策の課題であるが、そこに求められるのは「技術」ではなく「人間性」の考察、社会に関する哲学である。そしてその基礎には、次のような近代小説と相似形であった 20 世紀の前近代破壊的な政策に対する反省がなければならない。

近代小説は人間の自由と解放を主張し、人間の個性を尊重する役目をして来たが、それは一面ではエゴ(自我、我欲)を掘り出したようなものであった。その掘り出してしまったエゴは、近代社会の初めに「自由、平等、博愛」という標語で善の目標と合致するように考えられていたのに、だんだん違ったものに見えてきた。人間のエゴは自分を生かそうとするあまり、他人にたいして残酷な働きをもする醜悪なものである、ということがわかって来た。(中略)それはまた、他の面から言うと、そのやり方では人間を十分に描き尽せないのではないか、という疑いにもなる。(中略)

われわれのやり方では、古典的文学以上のものを書くことはできないのではないかと文学者は考えるようになった。古典文学の力強さはどういうところにあるか、ということを改めて考えなければならなくなった。

古典作品と違う近代文学者の特色は、人間の個性とかオリジナリティというものを尊重するあまり、(中略)自分だけが作り出したところの新しい形式で、新しい思想で、新しい題材を持ったものが尊いとされる。しかるに古典文学は、(中略)一個人だけの力によってできたものではない。いろいろなエピソードが、いろいろな作家たちによって自然発生的に作られ、それがその弟子たちによって語り伝えられて、何代か受け継がれる。その間に、次第に作り直されて行って、形が変わり、人間を感動させる急所は大きく描き出され、力強いものになってくる。それを、ある時、別な有力な作家が出てきて、総合して一つの大きな作品にまとめあげる。あるいはそういう伝承されたいろいろな小さなものを、新しい思想によって、別な目で、別な光を与えながら描き直す。そういうふうにして古典作品はできた。であるから、古典作品には、誰が本当の作者であるか分からないのがしばしばある。(中略)

そういうように層を重ねてできた古典作品は、近代の作家がいかに豊かな才能をもってしても、対抗することのできない特殊な力を持っている。では、どういうところにその差異があるか、というと、はっきり分かることの一つは、近代になってからの作家は、紳士としての自分の体面において、ある解決なり、ある判断なりを下さなければならぬ。ところが、個人のエゴが非常に醜悪なものであることが分かって見ると、紳士として判断を下す時には、個人のエゴのじっさいの姿に仮面を被せて判断を下しがちになるものである。その個人としての良心的な弱さに、近代文学の弱点が現われてくるのである。(中略)その問題は、つまり個人のオリジナリティ、個人の署名した作品、個人の創作、という限界によって出てくるものである。

(伊藤前掲書)

日本の「近代」は西洋を進んだものと見、それを模倣するという単線的な「縦断面」の視点で世界を見てきたわけだが、それが「限界」に突き当たった。その限界を超えるのは「横断面」の物語である。それを正面に据えることによってのみ新しい物語が始まる。この点について野家前掲書は次のように述べている。

彼(ブルクハルト)によれば、年代記的に配列された縦断面を描き出す歴史哲学は、例外なく「私たちの時代こそすべての時代の完成であり、そうでないとしてもそれに近く、すべてかつてあったものは私たちを目指していたものとみる」という誤りをおかしているのである。しかし、それぞれの時代はそれ自身のために存在しているのであり、何も次の時代のために存在していたわけではない。そのことを踏まえるならば、歴史叙述の出発点は歴史過程のただ中を生きるわれわれ自身であるほかはない。(中略)歴史のただ中で忍苦し努力し行動する人間によってなされる情念論的考察、それこそが歴史の「横断面」にほかならない。多方向から切り出された横断面の有機的連結こそが、歴史叙述の本体をなすのである。

この「横断面」の物語は、「小さな物語」である。

(3) 物語のネットワーク(大きな物語)

「小さな物語」の意義が十分に認識されれば、それは「小さな物語」のネットワークとして歴史を構築しようとする構想へと向かう。引き続き野家前掲書から引用する。

う。

ブルクハルトの「私たちの心の裡に響いてき、私たちが心から納得するものとして繰り返すもの恒常的なものを考察する」という言葉は、(中略)柳田國男による常民の口頭伝承をめぐる叙述と遠く響き合うものがある。柳田が語ったのは、村の老翁や故老たちが伝承する「小さな物語」としての歴史であった。事実、柳田は『明治大正史世相篇』の自序において、まさに「横断面」という言葉を使いながら、「打ち明けて自分の遂げざりし野望を言うならば、実は自分は現代生活の横断面、すなわち毎日我々の眼前に出でては消える事実のみに拠って、立派に歴史は書けるものだと思っているのである」と述べ、歴史の縦断面とも言うべき「在来の伝記式歴史に不満である」ゆえんを語っている。こうした柳田の提言を一つの歴史哲学的主張として読み、それを先のヘーゲル批判の文脈と重ね合わせるならば、ブルクハルトもまた、弁神論や救済史観によって代表される「大きな物語」を拒絶し、受苦的(pathologisch)人間が語る「小さな物語」のネットワークとして歴史を構想しようとしていたのである。

この「小さな物語」のネットワークとしての歴史を「歴史のマイクロロジー」と呼ぶことができる。それと対比するならば、ヘーゲルにおいて頂点に達し、そこで終焉したのは、まさに「歴史のマクロロジー」にほかならない。現在置かれている歴史哲学の窮境は、この歴史のマクロロジーがもはや不可能になったことに由来している。それを支えてきた神学的表象が、いまやどこにも成立の基盤をもちえなくなっているからである。歴史哲学がこの窮境を突破する道を見いだしうるとすれば、それはマクロロジーからマイクロロジーへという歴史意識の根本的な転換を成し遂げることをおいてはほかにないである

昨今の社会の脆弱化に対して「神」を再登場させるような「神学的表象」では社会を再生させることはできない。この点はデュルケムの「機械的連帯から有機的連帯へ」という歴史認識を踏まえればなお一層明らかであろう。社会を再生させるためには「小さな物語のネットワーク」を構想せざるを得ないのである。しかしそのネットワークを支えるものは何であろうか。

それでは、「歴史のマイクロロジー」を展開する基盤は、どこに求められるべきなのか。その手がかりをブルクハルトは、「精神はさまざまな地上の諸時代を経て生きてきたことの想起(Erinnerung)を自分の所有に変じなければならない。かつて悦びや悲しみであったものが、本来個人の生活においてもそうである通り、今や認識とならねばならないのである」という形で述べている。歴史の横断面を認識する基盤は「想起」にほかならない、これがブルクハルトの答えである。むろん、ここで「想起」は伝聞や伝承をも含めた広義の記憶作用として理解されねばならない。彼が「精神」という言葉にこめていっているのは、そうした連続性だからである。

(野家前掲書)

「小さな物語」を再生させ、そのネットワークを構築するための基礎は、「想起」である。これまで「発展」の名の下で沈黙させてきた人々の想いを顕在化させ、それらをネットワークでつないで堆積していく。そこから新しい物語が生まれる。その物語は人と人との結び付きを強める。それがネットワークの拡大をさらに促進する。そうしてそれが本当の「大

きな物語」になっていく。

3. 街と物語との関係は何か

(1) 街の意味

街とは何か、という問いは都市とは何か、都市の正体は何か、という問いと同じで、答えるのがなかなか難しい。難しいが、この問いを考えることがいま最も重要になっている。20世紀は概念より実践という時代であったが、いまや概念の議論をきちんとしないと満足な実践ができない時代になっている。都市政策の出発点に都市の正体は何か、という政策にとって致命的に重要な問いが立ちふさがっている。

その問いは、重要ではあるが、やはり難しい。それは、都市とはどうやら他の地域にはないものという補集合の概念であるらしいからである。つまり都市がなくても何も困らないのであれば都市はいらない。困るから都市が出てくる、というような存在が都市なのである。したがってすべてが都市のようになってしまうのであれば、それは都市型社会ではなく非都市型社会である。

この点に関しては改めて深く考察しなければならないが、今回は物語の考察のためにとりあえずの定義をしておくと、都市とはオフショアセンターのようなものである。そこには周辺の地域にない自由がある。人と人が既成の慣習や組織に縛られず個人として自由に触れ合い、会話し、取引し、思想を述べあうことができる場が都市である。もちろんその自由は人々が一定のルールを遵守することによって支えられる。まったく自由な自由はありえない。ルールとしては、例えば他人の自由を尊重する、他人にルールを越えた何かを強制しない、自分の欲望のために他

人の自由を不当に制限しない等がある。人に同質性を求め異論を排除しようとする金太郎飴的な集団主義は都市にもっともふさわしくない組織である。

このような視点で都市の性質を考えてみると、それは研究の性質ととても似ていることがわかる。先に「研究者」の要件として、真理を見出そうとする不遜で謙虚な姿勢があること、全てを疑う広い心があること、の2つを掲げたが、これは「市民」の要件でもある。

都市とは外部があってこそ成り立つものであり、外部がなければ消え去る運命にあるものであるから、外部から敵視される都市は消えていく。したがって市民は外部に対して心を開いていなければならない。それはどこまで開けばよいという限界があるものではない。都市は非常に不安定な存在であり外部環境の変化に応じて簡単に存立基盤が崩れてしまうものであるから、どこまでも開くという姿勢が必要である。それは内向きのムラ的人間から見れば自分の能力をわきまえない不遜な態度ということになるが、外から見れば謙虚な姿勢ということになる。

また、都市には外部からさまざまな人が集まる。つまり都市は本来的に同質社会ではなく異質社会である。都市では黙っていても気が知れるなどということはない。ムラ社会的感覚で安易に人を信じる行為は社会を破壊する行為になる。常に対話を通じてお互いの意思を疎通させ、それを手段として常に自分の頭で物事の真偽善悪を判断することが市民には求められる。それが外に開いた社会の基盤となる。したがって、市民には全てを疑う広い心が求められる。その上での判断は、もし誤っていても、人のせいにするのではなく自らの責任としなければならない。

このような社会にムラ社会的人間が多数混じりこめば、それは都市社会の著しい衰退を引き起こす。

都市の性格は物語の性格ともかなり共通する。物語に必要なのは、人々の自由である。その自由は一定のルールの下でのものである。例えば、自分の主張を通すために他人の主張を抑え込まない、他人との対話を拒まない、異質な思想を排除しない、目的達成のためにプロセスを犠牲にするなどということをしていない、成果物に自分の固有名詞を貼らない、自己の存在を誇示しない、起源にこだわらない、期限を設けない等のルールである。

都市の性格がこのようなものであるならば、街の性格もそれと同じものでなければならない。例えば人々の物語があるところに、その人々の了解もなしにその物語を否定するような暴力的な物語を外部から挿入してはならない。新しい物語を作りたいがために既存の物語を暴力的にクリアするようなことがあってはならない。街の物語を拒絶するように外部と内部とを遮断する城砦のような構造物を設けてはならない。他人の言動を一方的に監視するような機械を勝手に設置してはならない。市場メカニズムにのっとりた独占的行為により街の物語の衰退を招くようなことは行なってはならない。たとえ紙の上の権利であっても街に入り込む者は街に対する社会的責任を果たさなければならない。

ところで上では「ムラ社会的人間」という言葉を用いたが、本当のムラに住んでいる人にはこれは不愉快かもしれない。そこで少し補足すると、ここで言う「ムラ社会的人間」とはあくまで概念的なものである。その概念とは、「集団の中の人間はすべて同質的であ

るべきで、成員は集団の方針に異論を差し挟むべきでなく、したがって対話を通じて時間をかけて意思疎通を図るなど迂遠なことは必要なく、皆が一丸となって同じ目的に邁進すればよい」というような動物的感覚を持つ人間のことである。これを「ムラ社会的人間」と称するのは、水田経営に立脚するが故に生産性が高く、かつ自然は変化しやすく制御不可能なものであるため、議論など無益で兎にも角にもひたすら決められたことをやっていけば生きていかれるという日本のムラに見られる閉鎖性の故であるが、日本のムラの全てがそうであったわけではないらしい。実際には「開かれた」ムラも多かったかもしれない。例えば宮本常一『忘れられた日本人』（岩波新書、1984年）には村の「寄りあい」が次のように記述されている。

会合では郷土も百姓も区別はなかったようである。領主 - 藩士 - 百姓という系列の中へおかれると、百姓の身分は低いものになるが、村落共同体の一員ということになると発言は互角であったようである。(中略) そういう場での話し合いは今日のように論理づくめでは収拾のつかぬことになっていく場合が多かったと想像される。そういうところではたとえ話、すなわち自分たちのあるいて来、体験したことに事よせて話すのが、他人にも理解してもらいやすかったし、話す方もはなしやすかったに違いない。そして話の中にも冷却の時間をおいて、反対の意見が出れば出たで、しばらくそのままにしておき、そのうち賛成意見がでると、また出たままにしておき、それについてみんなが考えあい、最後に最高責任者に決をとらせるのである。これならせまい村の中で毎日顔をつきあわせていても気まずい思いをすることはすくな

いであろう。と同時に寄りあいというものに権威のあったことがよくわかる。(中略)

この寄りあい制度がいつ頃完成したものであるかは明らかでないが、村里内の生活慣行は内側からみていくと、今日の自治制度と大差のないものがすでに近世には各村に見られていたようである。そしてそういうものの上に年より衆が目付役のような形で存在していた。ただ物のとりきめにあたって決定権は持っていなかった。と同時に寄りあいではなしあいには、お互いの間にこまかな配慮があり、物を議決するというよりは一種の知識の交換がなされたようであり、個々の言い分は百姓代や畔頭たちによって統一せられて成文化せられたのである。

村運営における物語の重要性、有用性がこの記述でよくわかる。日本の都市にはコミュニティがないとよく言われるが、日本の都市が都市社会になるためには日本の村に学ぶべきかもしれない。木村礎『村の生活史』(雄山閣出版、2000年)には村の青年会規約として「人ヲ讒謗罵言シ名誉ヲ害スル事勿レ」「人の交際ハ懇篤ヲ主トシ信義ヲ厚フスベシ」等が紹介されているが、陰で人を誹謗中傷する人間が今日まことに多いことを思うと、これらは都市の規約にでもすべきものである。また木村礎『村のこころ』(雄山閣出版、2001年)には大原幽学の教育が紹介されているが、それには人と人との対話を円滑にする知恵が溢れている。同書には、村が必ずしも閉鎖的ではなく広域にわたってネットワークを築いていた事実も紹介されている。これらは今日の都市運営にあたっておおいに参考になるであろう。

さて、街の成熟過程は物語の成熟過程に

似ている。そのことは2(2)で引用した伊藤整前掲書の記述から感得できるであろう。都市もそのようにして風景ができ、都市の風格、品格が確立する。そのためには学問や知識だけではなく、はっきりした思想を持っている者が必要である。この点は都市に関する研究、政策においても同じである。そのような思想は20世紀の「大きな物語」からは出てこない。「発展」「進歩」などは一種の思考停止でしかない。都市に関しても改めて「小さな物語」を見ていかなければならない。

なお、街で自分の物語をするということは私小説を書くことに似る側面があるかもしれない。もしそうなら、それには次のような効用がある。

小説家が自分のことを材料にして自分の生活を描くと言っても、事実そのままは決して描かれるものではない。描かれたものは、作品としての調子を保つために、現実とは別個な組み立てになってしまう。ただその組み立ての各所に嵌めこまれている実感というものが、現実から移し植えられているに過ぎないのである。(伊藤整「小説の復活」)

『伊藤整全集第15巻』新潮社、1974年)

主張したい方向は多分逆になってしまうが、街で物語をすればどうしても自分をカタル部分が出てくる。隣近所、前後左右と調子を保つために作る部分が少しは出てくる。しかし、それは自分が望ましいと思う方向であったりもするので、言った後から本当の自分がついていく。それが街としての形になっていく。こういうことが期待される。本稿においても、書いている最中は「どうかな」と思いつつも前後の関係で調子を保つために書いて

しまうことがある。そして書き終わったときには「そうかな」と思っている。こういう効果がある。

(2) 横断面としての街

「小さな物語」の意義が十分に認識されれば、都市の将来のために今の環境が激変するのは仕方がないとか都市の活動を維持するために人々が例えば日照等を我慢すべきだなどという議論にはよほど気をつけねばならないことがわかる。ある目的を達成するために今を犠牲にする、などという発想ほど古いもの(20世紀的なもの)はない。人にとっても都市にとっても目的はなく、無限のプロセスだけがある。プロセスが不幸では都市は美しくならない。

2(1)では物語の要件を6つ掲げたが、街も本来はそれらの要件を満たすものであるように思われる。それらの要件を欠いてしまうと街ではなくなる可能性がある。例えば経済効率最優先の兵舎型(あるいは営倉型、鶏舎型)都市空間には ①の草の根的性格がない。「発展」「進歩」を純化して体現した空間には ②の日常性がない。同好のおたくだけで作る街には ③の人に語りかける内容がない。「神話」が上から強制される空間には ④の変化するゆらぎがない。「道徳」が外から強制される空間には ⑤の自発性がない。スラム・クリアランス型開発、テーマパーク的都市づくりの中には ⑥の過去を大切に扱う姿勢がない場合がある。

「小さな物語」が街の物語の本質であろう。その「小さな物語」の特徴である独創性、起源、作者等の不在は、前々回引用したルイス・カーンの「あったものは、常にあったものである 今あるものも、常にあったものであ

る」という言葉や人々の中に既にある音楽を見出そうとするドヴォルザークの哲学、デザインの原形を探そうとする深澤直人の姿勢にも見出される。街づくり、都市再生はこの「小さな物語」によって実現する。20世紀の「大きな物語」によってではない。

「大きな物語」が失われた今日、街に物語などあるのか、物語はもはや街を超えた場所、例えばファンタジーの中にしかないのはいないか、という囁きも聞こえるが、J・ブルクハルトが「歴史のただ中で忍苦し努力し行動する人間によってなされる情念論的考察」の「有機的連結」こそが「歴史叙述の本体」となると言っていることを是とするならば、街にこそ深く広く大きな物語につながる小さな物語がある。

しかしながら都市におけるその認識はいまだ希薄である。それは「近代」の反省が都市においては十分に行われてこなかったことによるものであろう。そのためポスト・モダンも結局のところモダン以前の過去の断片的な組み合わせでしかなかった。「小さな物語」の鍵である「過去を想起すること」が街に住む人々とは関係のない「専門家」の勝手な「思想」で街にちりばめられてしまった。それは過去からの堆積がない一種の「エゴ」である。そのようなエゴ剥き出しの私空間が増殖し、公空間が衰弱する。ミース的な空間ですら今になってさらに広がりつつある。伊藤前掲書の表現を借りるならば、ある主体が「紳士としての自分の対面において」「エゴのじっさいの姿に仮面を被せて」「判断を下しがちになる」。それが人々のつながりがつくるきめ細かな空間を潰していく。それが「個人のオリジナリティ、個人の署名した作品、個人の創作」の限界として表出する。

結局この都市の問題を正面からとらえるためには、いまの社会の実相を正面からとらえなければならない。それを伊藤前掲書は次のように描いている。

近代の社会がゆきづまってきた点は、いろいろなところから起ってきている。(中略)社会が安定し、固定すると、有利な立場の人間と不利な立場の人間ができ、(中略)そこから逃げ出さない人間は、表面はその偽善や虚礼やヘツライというようなものと妥協し、自分の本心を露わに示さないようになる。(中略)二重の性格を持ってその社交界の中で生きるようになる。そのような現われ方は、じつは社会全体の組織が固定して流動性を失ってきたことと関係がある。正しい意見を持っている人や、労働を身をもってしている人の意見がとり入れられずに、既得権を守る人間がその社会を実質的に支配している。(中略)

近代社会では、人間生活の手段であった生産形式が逆に人間を支配する傾向がある。(中略)人間は、その生産様式を、はじめは自分の生活の便宜に作り出したのにかかわらず、しまいには生産の様式、生産競争のために自分がその犠牲になり、その機械の一部として働いていることになってくる。(中略)

政治というものも、(中略)政治や生活にたいする意見の発表機関が、印刷術の発展につれて大規模になってゆく。(中略)新聞があまりに大部数になると、その新聞の意見の作り方がすぐに民衆に影響を与えて、逆に人間の方が新聞の暗示にかかって、(中略)誰も彼もが、その新聞の影響を受けて同じ意見になる危険がある。(中略)ジャーナリズムの力を利用する政党や政府が、進歩的な改良と批判とを受け入れなくなって、その立場を絶対的に守

ろうとすると、それは、反対の考え方の発言を弱め抑圧しはじめる。そして、自分の政党の秩序を批評したり、それを改革しようとする人間を社会から追放し、それを犯罪であるとする。(中略)

政党や国家は、自分の組織の保存と強化を第一目的とする結果、根本の人間尊重という動機をも無視しがちになって、その中にいる党员や国民の自由を犠牲にしても、それを顧みていられなくなってしまう場合がある。(中略)この危険は、国家や党だけでなく、前述の工場組織やジャーナリズムの組織の中でも起りうることである。これが現代社会の最大の問題であって、人間についての考えを述べる芸術である文学は、これを問題にせざるをえないのである。営利会社と言わず、政党と言わず、雑誌と言わず、新聞と言わず、あるいは生産工場においても、すべて組織化され、機械化され、巨大になったものは、人間性に対して残酷なことをしでかす、という危機が大きくなっている。(中略)

現代の人間が、個人の自由を意識し、それを何よりも貴重に感じている、というこの自覚による発見を消すことはできない。自由を、現在の巨大な力を持った組織と対置させ、どのようなものとしてつらぬくか、という点に、たぶん現在の社会の、それゆえ社会的な意味での道徳や芸術の、根本問題があることは否定できないのである。

この指摘が現代の日本によく当てはまっていることは改めて具体的な事例を掲げるまでもないことである。「道徳や芸術の根本問題」は都市再生の根本問題でもある。

自由を獲得するはずの「近代」が人間を抑圧する、という問題が都市再生問題の根底

にある。その抑圧から逃避する空間も「近代」がテーマパーク的に提供しているので、問題の根は深い。本来個々に追求するヒーリングも市場が画一的に供給している。さらに、希望をつなぐべき文学も昨今は商業主義に陥っているらしい。

人間や社会を深く考える作家が文学の「市場」から外されていくとしたら、いよいよ社会も終末的である。文学ですら売り手の儲けのために選別されてベストセラーになり、それが安直な「感動」という名の感覚に直ちに反応する感熱紙のような人間の形成を促進する。この悪循環から脱却する道は市場メカニズムからは出てこないわけであるが、今日の文学づくりのプロセスと都市づくりのプロセスとを並置して眺めてみると、深く考えさせられるものがある。

どのようにすれば都市づくりを「小さな物語」の方向へ向けなおすことができるのか、磯崎新の次の話が大変参考になる。

「海市」(1994)は蜃気楼都市と呼ぶようにエフェメラルに立ち上がり、ゆらめいて消えていくことをあらためて予想していました。だが何よりもこの企図は「近代」がその思考の拠りどころにしていた基体概念である「時間」と「空間」の否定。そして進歩といったまやかしのスローガンを正当化する「計画」という運動の無化を確認する作業でした。「海市」をワークショップ(1997)にまとめるに当たって、次のように記してあります。

「目標(テロス)」を消去して、自動生成にまかせよ！

「中心」を無化して、網目で埋めよ！

(磯崎新・土居義岳『建築と時間』

岩波書店、2001年)

この視点はこれからの都市形成の方法論を考える上で極めて有用であろう。それは第1回で述べた「弱い都市」の視点とも共通する。また、「目標」も「中心」も無化する「物語」は先に引用した柳田國男の志に通じる。

さて、街の「小さな物語」をつくるのは街の「記憶」、「想起」であるが、それに関してはやはり谷崎潤一郎『陰翳礼讃』が参考になるので、以下に引用しておきたい。

美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生まれているので、それ以外に何も無い。西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、ただ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないと云う風を感じるの、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。(中略)われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。われわれは、この力の無い、わびしい、果敢ない光線が、しんみり落ちて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。(中略)われ等は何処までも、見るからにおぼつかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも余命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。我等に取ってはこの壁の上の明るさ或はほのぐらさが何物の装飾にも優るのであり、しみじみと見飽きがしないのである。さればそれらの砂壁がその明るさを乱さないようにとただ一と色の無地

に塗ってあるのも当然であって、座敷毎に少しずつ地色は違うけれども、何とその違いの微かであることよ。それは色の違いと云うよりもほんの僅かな濃淡の差異、見る人の気分の相違と云う程のものでしかない。(中略)

われわれ東洋人は何でもない所に陰翳を生ぜしめて、美を創造するのである。「掻き寄せて結べば紫の庵なり解くればもとの野原なりけり」と云う古歌があるが、われわれの思索のしかたとはかくそう云う風であって、美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える。(中略)

だが、いったいこう云う風に暗がりの中に美を求める傾向が、東洋人にのみ強いのは何故であろうか。西洋にも電気や瓦斯や石油のなかった時代があったのであろうが、寡聞な私は、彼等に蔭を喜ぶ性癖があることを知らない。(中略)案ずるにわれわれ東洋人は己れの置かれた境遇の中に満足を求め、現状に甘んじようとする風があるので、暗いと云うことに不平を感じず、それは仕方のないものとあきらめてしまい、光線が乏しいなら乏しいなりに、却ってその闇に沈潜し、その中に自らなる美を発見する。然るに進取的な西洋人は、常により良き状態を願って已まない。(中略)僅かな蔭をも払い除けようと苦心をする。(中略)

先年、武林無想庵が巴里から帰って来ての話に、欧州の都市に比べると東京や大阪の夜は格段に明るい。(中略)恐らく世界じゅうで電燈を贅沢に使っている国は、亜米利加と日本であろう。日本は何でも亜米利加の真似をしたがる国だと云うことであった。(中略)どうも近頃のわれわれは電燈に麻痺して、照明の過剰から起る不便と云うことに対しては案外無感覚になっているらしい。(中略)

現代の文化設備が専ら若い者に媚びてだ

んだん老人に不親切な時代を作りつつあることは確かなように思われる。早い話が、街頭の十字路を号令で横切るようになっては、もう老人は安心して町へ出ることが出来ない。(中略)今に文明が一段と進んだら、交通機関は空中や地下へ移って町の路面は一と昔前の静かさに復ると云う説もあるが、いずれその時分にはまた新しい老人いじめの設備が生まれることは分りきっている。(中略)頃来大阪朝日の天声人語子は、府の役人が箕面公園にドライブウエーを作ろうとして濫りに森林を伐り開き、山を浅くしてしまうのを嗤っているが、あれを読んで私は聊か意を強うした。奥深い山中の木の下闇をさえ奪ってしまうのは、あまりと云えば心なき業である。この調子だと、奈良でも、京都大阪の郊外でも、名所と云う名所は大衆になる代りに、だんだんそう云う風にして丸坊主にされるのであろう。(中略)

私は、われわれが既に失いつつある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂の檐(のき)を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。それも軒並みとは云わない。一軒ぐらいそう云う家があってもよからう。まあどう云う工合になるか、試しに電燈を消してみるのだ。

(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中公文庫、1975年)

「美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にある」というところは実に印象的である。街の景観も物体ではなく陰翳で見ることが肝要であろう。今そこにある「陰翳」を礼讃する気持ちこそが街づくりの原点である。それが「小さな物語」を大切に思う気持ちを育み、その気持ちと気持ちとのつながりが「横断面」としての街の物

語を紡いでいく。野家啓一言葉を借りて言うならば、街は「超越的視点から俯瞰される」ものではなく、あくまでもそこに内属して生きる人々によって「物語られる」べきものである」。

(3) 街のネットワーク

都市再生を都市社会再生として実現しようとするれば、「それはマクロロジーからミクロロジーへという歴史意識の根本的な転換を成し遂げることをおいてはほかはない」(野家前掲書)。つまり「小さな物語」のネットワークとして都市再生を構想せざるを得ない。

「小さな物語」のネットワークというのは具体的にはどのようなものになるのであろうか。これは個々の街の、下からの自発的な連合のようなものになるので、何とも言えないが、思い付きで言えば、共通の祭を担う街の範囲などというものが考えられる。

例えば今年富岡八幡宮の例大祭の年であるが、その祭は 56 の町丁が担っているので、その範囲のネットワークが考えられる。このような既存のネットワークに商店街の活性化などを組み込んで前回述べたような街の情報組織化を図っていけば、都市再生もおおいに進むものと期待される。

しかしまた、下からの自発的な働きかけを待っていたのではなかなかネットワークはできない、ということも別稿に掲げた東京都の商店街アンケートを見る限り思わざるを得ない。そこでさらに思い付きで言えば、例えば次のようなことが考えられる。

「小さな物語」のネットワークと言う以上、本来であれば情報システムも個々の「小さな物語」に応じて組み上がってくるべきものだが、それは技術的にも人材的にもとても壁が高そうなので、ちょっと中間省略的に考えてしまうと、ひとつの方法として、はじめに商店街の連合会だけでなく周辺の街(住宅地等)も取り込んだの街の連合会をつくってしまう。その連合会が学識者を交えながら商店街と周辺住民等とのパートナーシップの雛形をつくる(本来街づくりに雛形があるなどというのは変な話なのだが、システムに関しては高度な専門知識が必要になったりするのでやむをえないであろう)。街の中にはいろいろな人がいる。例えばコンピュータの知識は人に売るほどあるのに職がなく暇で暇で仕方なく毎日カップラーメンをすすりながらゴロゴロしてテレビゲームをしているお兄さんが沢山いたりする。知識はないけれど健康だけが取り柄で毎日毎日ひたすらジョギングをしている人も多そうである。体には全く自信がないが考えることだけは大好きという人も少しはいるかもしれない。人生あと死ぬだ



(江東区内の町内掲示板より)

けという人も機会があればもう一花咲かせたいと思うに違いない。そのような人たちをうまく活用できる街づくりの雛形をつくり、それを基本形として個々の街が周辺住民等に呼びかけ工夫を加えながら街の組織をまとめ街のシステムを作っていく。カネはとりあえず公的補助や企業の社会的貢献等に期待したい。足りなければ自治体がユニークな特別税を創設してカネのありそうなところから取ってしまえばよい、というのはやや無責任だが不可能ではないであろう。

街のシステムができあがって情報や物やサービスが人の顔が見える形で行き来するようになれば、そこに「小さな物語」のネットワークが生まれるであろう。物やサービスに関しては、個々の住民等のニーズを街の連合会組織がとりまとめてどこかに一括発注すれば、安値で仕入れることができるに違いないし、各家庭へは家庭の事情に応じて地域の人々の力により有機的な宅配サービスを行なうこともできる。このような活動に対しては地域通貨によるインセンティブを付与することが有効であろう。

ゆくゆくは複数の連合会の間でもパートナーシップを組み、相互に不足しているもの(労働力等の資源)を相互融通し、また海外等も含め共同発注によりさらにコストを引き下げていく。その先の将来においては海外のパートナーシップとも連合を組み、フェアトレードの運動にも結び付けていく。

このようにして街の「小さな物語」をネットワークで結んでいけば、最終的には全世界の街を結ぶ「大きな物語」にしていくことも不可能ではない。この運動は「オルター・グローバル化」の運動とも結びつくものであり、世界を変える大きな原動力になる。これ

によって真に生活者主体の経済、持続可能な経済を地球規模で実現することができる。街の「小さな物語」が世界を根底から変える「大きな物語」につながっていく。これは地域の制約から自由である補集合としての都市だからこそできるものである。

身近な陰翳を大切に作る心が世界的につながれば、世の中もずいぶん平和になるに違いない。地球環境問題もおおいに緩和される。餓死から救われる人々も増えるであろう。産地が明らかなものを食べて健康で長生きすることも可能かもしれない。そのすべてがこの足元の街づくりから始まるとするならば、人々が街づくりの物語に関心を持たないわけがない、ちょっと即物的で眉唾なところもありますが。

なお、余談として付け加えれば、街が上のような形で世界につながれば、日本人の意識もずいぶんと変わって日本にも真の国際人が多数生まれることが期待される。日本人は言葉の上でも世間と世界とを分け、関心があるのは前者だけで後者には知らん顔という心を持っている、ということが中川正之『漢語からみえる世界と世間』(岩波書店、2005年)に次のように述べられている。

どうも我々は、小さな嘘には目くじらをたてるが、大きな嘘には寛容である。それは小さな嘘は世間語であり、大きな嘘は世界語であることと関係がありそうである。世界的なことは抽象的なことにつながり、そう目くじらをたてる必要がないのである。阿部氏の指摘を敷衍すれば、我々は『我がこと』につながらなければ、どんな大きなことでも無関心でいられるのかもしれない。(中略)

孫歌氏は「他人」と「他の人」という短い文

章の中で、日本語の「他の人」は知り合い同士のサークルの中の自分以外の人のことであり、「他人」はまったく面識のない、いわゆる「赤の他人」のことであると指摘し、中国語にはそのような区別がないという。

街において他人の自由を尊重するコミュニティ精神を涵養しなければならないなど言っても、そもそも他人が「赤の他人」であっては取り付く島がない。街づくりとは日本人の精神改革に遡る実に壮大な試みなのである。

中川前掲書には、ある中国人留学生が日本語学習の動機について次のように述べたことが紹介されている。

(私が日本語の勉強を始めたのは) 栄光ある人類の未来のためです。

日本人ならこのような言い回しに違和感を覚えざるを得ない。それは世界語に対する違和感である。同書には世界語、世間語として次の例が掲げられている。

世界語： 未来 こんにち 社会 人類 繁栄
貧困

世間語： 将来 きょう 世の中 人間 繁盛
貧乏

我々は将来の人間のために美しい都市を残さなければならない……、小さい。我々は未来の人類のために美しい都市を残さなければならない。

4. 社会の行方

(1) 社会の型

街づくりが「小さな物語」から始まるとしても、その「小さな物語」はそれができる社会がなければ始まらない。したがって街づくりや都市再生では、まずもって社会の実態を知ることが肝要である。

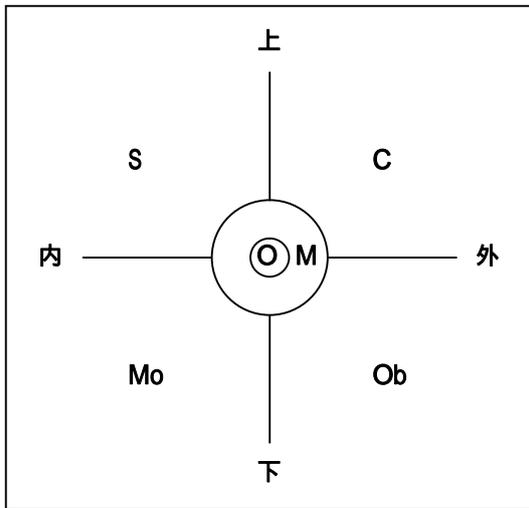
社会の実態を知るためには、その社会を構成する人間の性向を把握しなければならない。その性向は2つの方向に分けて考えてみるとわかりやすい。

ひとつは上下方向である。これは、上昇しようとするのか(良くしようとするのか)、下降しようとするのか(潰そうとするのか)、あるいは上も下もなくただ現状を維持しようとするのか、という性質の力を表わす。もうひとつは内外方向である。内に向かって沈殿しようとするのか、外に向かって広がろうとするのか、あるいは内も外もなくただ現状を維持しようとするのか、という性質の力である。

なお、伊藤整『改定 文学入門』では生の認識における下降認識・上昇認識というタテの関係と人と人との我欲の対立というヨコの関係を対比しているが、上記の2方向はそれにヒントを得たものである。もちろん伊藤前掲書の概念展開は大変優れた芸術論であるわけだが、ここでの概念展開は芸術論とは無縁の極めて俗な事柄に関するものである。

以上の両方向の力を図示すると次図のようになる。内視鏡検査のような今ひとつ品性が感じられない図であるが他意はない。

図の中は6つの領域に分かれており、それぞれに人の性向を示す記号が付されている。



Mは上下内外に関心がなく、ひたすら現在の領分の平和を維持することにのみ関心がある。一種動物的な縄張り維持の性向である。Mは争いを好まない平和の民であるが、領分の中では異質性を認めず同質社会を形成したがる。生産性は高いが時代の変化には弱い。

Oはさらに上下内外に関心がなくムラの社会にも関心がない。ひたすら自己の熱中する事だけを行なう。Oは極めて高い専門性を獲得して社会に大きな役割を果たすこともあるが、社会性が全くない事柄に熱中して社会とは無縁に生きることもある。人には関心がなく争いにも平和にも関心がない。自己の熱中する事を攻撃された場合にのみ角を立てて激しく反応する。

Cは広い外界に強い関心を持つ。真理を求めて異質な他者とも対話を行ない自己を高めようとする。他者を高めることにも貢献する。何より思惟することに人間としての生の意義を感じる。Cは真理を追究するために角をたくさん立て、それにこだわる。これはOのような角自体のためのこだわりではなく、真理を見出すためのこだわりである。

Sはひたすら自己の内面を見つめ自己を高めることに強い関心を持つ。外界とはあまり接触せず黙して語らない。Sは悟りを求める民であり、気がついたら死んでいたということもある。

以上4者の相違をわかりやすい例で言えば、「A氏は笑った」と10人が言うのを聞いて「A氏は笑った」と思いこむのがMであり、「それは自分の関心事項に入るか否か」と考えるのがOであり、「A氏が笑ったか否かは分からぬがこの10人はどのような意図を持ってこのようなことを言うのか」と考えるのがCであり、そもそも耳に入らないのがSである。この反応の相違が社会にもたらす影響は大きい。

MoはMの変種である。Mの中で次第に力をつけた者が自己を肥大させてこの変種になる。Moは他から否定的に扱われない限り人々に寛大で面倒見がよい親分のような存在である。しかしひとたび否定的な扱いを受けると、自己の小さなアイデンティティを守るために他を滅ぼす行動に出る。対話の精神が欠如しているので時間をかけて意思疎通することを拒み、いきなり攻撃する。

ObはOの変種である。Oが情熱の対象を失い、社会が自分に敵対していると思うようになってこの変種になる。情熱の対象は社会を滅ぼすこと、特段の理由なくむやみに他人を陥れることになる。我儘が受け入れられない幼児が破壊行動に出るような行動をとる。

以上のように人間の性向を分けて考えると、研究者というのはCになる。瞑想者はSである。禅の悟りはSとCとを行き来しているうちにすべてが空になって得られる。行き来していても空にならないのが市民である。

時代が未だ活力に満ち弾力性があるときは何より自由があるのでCが増える。しかし社会が成熟して安定的になってくるとMが増える。その安定が停滞になってくるとOが増える。そして時代が大きな転換期を迎えると変化を拒絶、破壊する方向でMがM₀に、OがO_bに変質する。一方、変化を積極的に受け止めようとしてCが増えてくるので、M₀及びO_bとCとの間に確執が生じる。M₀とO_bとの連合は強力であり、O_bはCを陥れるためにM₀を利用し、さらにM₀をも陥れようとする。M₀はもともと人を疑うことをあまり知らないののでその策略に容易にのってCを攻める。あるいは策略を知っていながらO_bを利用し、Cを滅ぼした後O_bを滅ぼそうとする。そのような社会に疲れたCはSになる。こうして社会が崩壊してまたはじめからやり直しということになる。Mの外の4つの象限には、第1象限から順に、共創、内省、戦争、テロ、といった言葉をあてはめることもできる。戦争とテロとは入れ替え可能である。

(2) オセロー化する社会

上記の関係は具体例によって説明するとわかりやすいと思われるが、とりあえず差し障りがない事例として、ここではシェイクスピアの『オセロー』を取り上げてみたい。卑見によれば、イアーゴーがO_b、オセローがM₀、デズデモーナがCということになる。以下にそれぞれの性格がよくわかる科白を抜粋したい(小田島雄志訳『オセロー』(白水社、1983年)による)。はじめにイアーゴーである。

イアーゴー

おれが家来になっているのはやつをうまく利用

するためだ。 /

ご主人様には忠勤ぶりをごらんに入れて、かげでこっそりうまい汁をすする、たっぷりすすって私腹をこやし、あとはわが身が第一だ。 /
神かけて言う、おれはやつへの愛や義務ではなく、そう見せかけておれ自身のある目的に従ってるんだ。

外にあらわれるおれの行為が、心の動きをそのまま目に見えるように外にあらわしていると思ったら大間違いのこんこんちきだ。 /

追いかけて毒を注いでやれ。街じゅうに謀反人だとふれ歩くんだ /

ムーアは気前がいい開けっぴろげの性質だ、そう見せかけるだけで忠実な男と思いつまむ、鼻づらをつかまえて引きまわせば言いなりになる、ロバのようにな。 /

ムーアめ、おれに感謝し、好意を抱き、褒美までやると言うだろう、あいつをさんざんばかあつかいし、心の平和を狂わせて半狂乱に追いこんだお礼にな。 /

おれはムーアの耳に毒を注ぎこんでやる /

その調子だ！こうして信じやすい阿呆どもはひっかかる。りっぱな操正しいご婦人もこうして、罪もないのに、辱しめを受けるのだ。

こうしてオセローはイアーゴーに騙されデズデモーナを殺害してしまうわけだが、その直後のオセローの科白は次のようである。

オセロー

かつては私も、このやせ腕一本、この名刀一振りをもって、立ち足かかるあなたの何十倍もの手ごわい障害も一気に蹴破ったものです - だがそれもむなしい高言だ！ /

私は国家に多少の功績があり、それは政府もご存じのはず。そのことはもう言うまい。

このような事件を起こした直後ですら思わず自己の功績を口走ってしまうところに自己撞着の凄さを見ることができる。彼の視野の中心にあったのは結局最後まで自分自身だったわけである。オセロー自身はこれを「名誉の殺人」つまり自分の名誉を守るための殺人と呼んでいたが、その名誉というも卑小な内向きの「名誉」であった。それに関しては森本美樹『シェイクスピアの悲劇 オセロー 愛の旋律と不協和音』(文芸社、2003年)が次のように指摘している。

彼が「名誉」を取り戻すために必死になって行ったデズデモーナ殺しは、実は失われてはいなかったオセロー本来の「名誉」を、本当になきものにするためのものだったのである。「名誉の人殺し」が実行されるとき、オセローはデズデモーナが愛した「名誉」とは違う「名誉」を必死で守ろうとしていた。夫としての「権威」を固守するために卑屈なまでにこだわった「名誉」は、デズデモーナが己の身を捧げた、彼の生き方をたたえる「名誉」とは質を異にする。オセローはそれを見誤ったのだ。(中略)彼は自分を取り戻すためにデズデモーナを殺したけれども、それは自分の全てを失うことになった。

一方、疑いを持たれたことを知った時のデズデモーナの科白は次のようである。

デズデモーナ

神様、お導きください、つねに悪を見て悪を学ばず、悪によりわが身を正すことができるように。

このような状況に至ってすら自己を否定し

自己を高めることを希求していたわけである。

(3) ヴェネツィアの衰退

『オセロー』の元になったのは1565年にヴェネツィアで出版されたチンティオの『百話集』ということであるが、16世紀半ばのヴェネツィアはすでに繁栄のピークを過ぎ、いまだ繁栄を維持しつつも徐々に衰退に向かいつつあった。もともとヴェネツィアは小国でありながら貿易を通じて外に発展し大国並みの経済力を持つに至った国であるが、その貿易を支える条件が失われてきた。高坂正堯『文明が衰亡するとき』は、その外的要因として、東方における強力なトルコ帝国の出現、フランス等西方の大国の軍事的強大化、東インド新航路の開設、西ヨーロッパ経済の内的発展、の4つを掲げているが、もっと本質的な要因として、貿易を支えてきた「自由で強い精神の衰弱」という内的要因を掲げている。そしてその例証として次のように記述している。

残念ながら、17世紀に入るところから、ヴェネツィア人にはそうした強さが失われて行ったように思われる。それは有名なガリレオ・ガリレイの地動説に対してパドヴァ大学の同僚たちがとった態度によく現われている。ガリレオはフィレンツェの生まれであったが、1592年にパドヴァ大学の教授に任命され、知的活動のひとつの中心となった。地動説の主張に至る彼の業績は、自由で合理主義的なパドヴァ大学の雰囲気なしにはありえなかったであろう。しかし、彼が望遠鏡によって木星の衛星などを発見し、やがて地球は動いているという説を持つに至ったとき、パドヴァ大学の他の教授たちはその

説を否定したいという気持ちに動かされた。ガリレオは1610年にパドヴァ大学を去る。その理由ははっきりしないが、パドヴァ大学の雰囲気は彼にとってそう快適なものでなくなっていたことがそのひとつの理由であったことは間違いない。

より明確な例証は、1630～31年の疫病が都市住民の3分の1の命を奪ったときのヴェネツィア人の対応である。それを天罰とみなし、ヴェネツィア人は神の怒りの前に謙虚に反省し、地上における神の代理人としての教皇に従うべきであるという主張が強力になされたのである。それを50年余り前、1575～76年の疫病のときの対応と比較するなら、変化はあまりにも明白である。50年余り前の疫病は伝染病に関する理論や、公衆衛生のためのよりよい方法を生み出したのであった。

言論の自由こそが国家繁栄の基礎だとするならば、異論を排除しようとする社会の「進歩」「発展」の実相は「衰亡」であり、言論の自由を縮小させる集団はそれにおおいに貢献することになる。一方、街における物語の広がりや国家の繁栄におおいに貢献するに違いない。

もっとも、自由の縮小と国家の衰亡との間の因果関係を一方向的に見るのは誤りであるかもしれない。塩野七生『続 海の都の物語』(中央公論社、1981年)は、精神の衰微の背景に産業構造の転換があったことを指摘している。15世紀までのヴェネツィアの経済は海運業、交易業に立脚していたが、トルコの台頭や新航路の発見等の影響から、16世紀初頭を境に手工業への依存度を大きく高めることとなった。そしてそれも外国との競争で衰微し始めると今度は農業に力を入れ

るようになった。この産業構造の変化が精神構造の変化を招いた。つまり資本の有無が経済活動の可能性を大きく規定する構造となったことから社会の流動性が低下し、貧富の格差が拡大し、経済や政治の様々な面が硬直化し、それが現状維持の内向きの精神の蔓延につながったということである。

この精神の劣化は一種の「独占」あるいは「寡占」の弊害と言うべきものであろう。言葉を変えて言うならば、社会の構造が「人々が自発的に小さな物語を紡ぐ状態」から「人々が大きな物語に従属する状態」へと変異したということではないかと思われる。これは「個人の自由」から「集団の統制」への移行でもある。この点に関しては高坂前掲書も次のように指摘している。

イギリスが上質の毛織物市場に進出し、ヴェネツィアの商品を脅かし始めたとき、ヴェネツィアの外交官や商人たちは、イギリスの毛織物は質は劣るが価格が安いので売れると報告しているのである。(中略)ヴェネツィア人は自分の商品への誇りからイギリス商品やオランダ商品の売れ行きを単に低価格で説明し、それ以外に理由があるのではないかを考えてみようとしなかったのである。

彼らがそのことに気づいたのはほぼ30年後である。(中略)気づいたなら、ヴェネツィア人もそうすればよかったはずである。彼らはなぜそうしなかったのか。ひとつには30年の立ちおくれが大きかった。しかし、より基本的には、彼らが競争に負けつつある原因が判ったときにも、彼らに対応策を講じえなかったことが重要である。それは、ヴェネツィアの生産体制が、きわめて硬直したものであったからである。ヴェネツィアにおいては、強力なギルド(職人組

合)が存在した。そしてそれが、16世紀の後半には、布地の製造方法や労働体制について、事細かに規制していた。企業家が染屋や織り手を選択し、新しい種類の布地を作ることではできなかったのである。(中略)

生産体制について細かな規制が存在したのは、生産に携わる人々の間に平穏な関係を保つためであった。それを破ることは、都市内の平穏を乱すものであった。こうして、ヴェネツィアの繊維産業は、内での平穏を守るために、普通に機能し、衰えて行ったと言えるであろう。

「内の平穏」を守る「ギルド」の規制が人々の自由を奪い国を衰亡させていく。

5. 街における物語の復活

(1) 自己否定の大切さ

転換期に社会を衰亡させないためには、何よりも自由を確保することが肝要である。そしてそのためには、「ギルド」の「内の平和」を最大限の力で突き崩していくことが必要である。そしてそれに替わって街の「小さな物語」をネットワークでつなげていくことが大切である。それは「自由の物語」であるが、その自由を支える力の源泉は「自己否定」である。

この自己否定の意義を考える上で次の文章は印象的である。

文学作品において、父を暴くとは絶えず子の役割である。(中略)文字を人が知っているこの方、物語や小説は絶えず「子」のものであり続け、一度も「親」のものであったためではない。表現する事、書く事は、「子」の作業であると言える。「子」が「子」としてあるのは生み、

かつ殺す「親」があるためだが、「親」とは「子」には悪としか言いようのない存在である。(中略)物語が「子」のものであるとは、「親」になるものたくらんだ事である。「親」ひとり、口をぬぐって生きている。

(中上健次『風景の向こうへ・物語の系譜』
講談社文芸文庫、2004年)

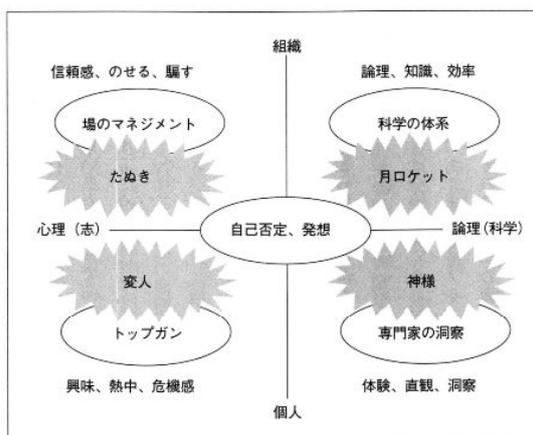
誠に穏やかならぬ表現で、昨今ではこれを文字通り了解してしまう恐ろしさもあるが、物語の自由を考える際にはなかなか参考になる。つまり物語に自由があるということは、過去の物語に否定を加えることができるということである。「暴く」とか「殺す」というのは落ち着かない表現なので「越える」とか「否定する」などと読み替えたいが、自由の源泉は何かを否定するところにこそある。否定するものが何もないければ、自由もない。存在があって自由があるのであるから、当たり前と言えば当たり前である。

否定する対象は「親」ばかりではなく「自分」でもある。これは先のデズデモーナの科白からもわかるように、キリスト教の教えでもあり、また、禅の教えでもある。都市で言えば、いま最も重要なのは20世紀の都市を否定することである。これは人生のほとんどを20世紀の都市の中で生きた(ことになるはずの)筆者にとっては自己否定でもあり、なかなか誠に不愉快である、がそれがいま必要である。

街の物語においていかに自分殺しを生かすか、ここが肝要である。本稿の前の方では「受け継いだことを生かす」などと言っておきながら、ここで殺すと言うのはいかにも矛盾しているように見えるが、殺すことによって生かすというのが自然の摂理である。否定するパ

ワーこそが生きるパワーである。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、という人間の教えにも合致する。何もかもを変えまいとすれば衰えて死ぬことになる。生かすことが必要なのは受け継いだ精神や心であって物ではない。

と抽象的なことを言い続けていても埒が明かないので、街づくりにおける具体的な方法論を見出さなければならない。それを見出す上で参考になりそうなのが吉田恵吾『共創のマネジメント - ホンダ 実践の現場から』（NTT 出版、2001 年）である。同書には次の大変興味深い図が掲載されている。この図はホンダの中のさまざまな議論を集約してできあがったものであるという。



この図は縦軸の上方向に「組織」、下方向に「個人」が、横軸の左方向に「心理(志)」、右方向に「論理(科学)」がとられている。両軸の交点にあるのは「自己否定、発想」である。その周囲の4象限の意味は次のようである。

まず第1象限は論理と組織とを必要とする「科学の体系」で、ここでは論理、知識、効率が重視される。ここにいるのは「月ロケット」を作るような人である。第2象限は心理と組織

とを必要とする「場のマネジメント」で、ここでは信頼感、のせる、騙すが重視される。ここにいるのは「たぬき」のような人である。第3象限は心理と個人とを必要とする「トップガン」で、ここでは興味、熱中、危機感が重視される。ここにいるのは「変人」である。第4象限は論理と個人とを必要とする「専門家の洞察」で、ここでは体験、直観、洞察が重視される。ここにいるのは「神様」である。

新しいものを開発していくためには4象限の間の協力関係が必要になる。そしてそれが「共創」の関係になっていくためには、人々が異質なものを表面に出すことが必要だが、何か工夫をしなければ無難なところでお茶を濁そうとしてしまう。それを防ぐためには違いを出しても大丈夫な場をつくるのが大切である。それを真中の「自己否定、発想」が担う。したがって「共創」のためには真中の「自己否定、発想」の領域を大きく膨らませていくことが大切である。この領域が周囲の4者を結びつける。ホンネの議論には議論の場における人々の平等が必要不可欠であるが、「自己否定」の精神は他者の話を真剣に聴くということにつながるので、真中の領域が膨らむことは平等意識の醸成にも寄与するものと思われる。

このような発想に至る考察の経緯が同書には詳しく書かれているが、その中のいくつかを以下に抜粋する。

創造的な企業とか創造的な人と言う時には、そのアウトプットに着目して言われるのが普通である。(中略)しかしそのアウトプットを行なう側、つまり創造的であらねばならない側から見れば、(中略)結果にいたるプロセス、経過のほうがより重要なのである。(中略)短絡的に結

果を求めてもよい結果は出てこない。(中略)

今までは結果が出るなら創造的なプロセスなど分からなくてもいいじゃないかという考え方が、現実的態度として強力であったことは否めない。(中略)「創造性の定義? そういう哲学的なことは暇な時に考えればいいんじゃないか」。こういう意見は必ず出てくる。(中略)

「創造」はいつまでも手段であるとは限らない。多くの部門には「創造性を高めよう」とか「創造的な人材の育成を」といったスローガンが掲げられている。(中略)この場合には「創造」は手段ではなく、目的になっているのである。(中略)

「創造」が目的になっているのに気づかず、「創造性とはどういうことなのか」についてよく考えておらず、「創造」について漠然とした認識しか持っていないので、(中略)結局火花が散っただけで損をして終わってしまうことになりやすい。(中略)

今や創造が目的である場合のプロセスについて真剣に考えないと行き詰まりになりそうなのである。(中略)今や企業が創造的で革新的であるには科学的管理だけではやっていけないのである。人間集団や個人が「自由闊達で共創的」でなくてはやっていけないようなのだ。(中略)

行き詰ってきた時の改善には力がない。(中略)創造と改善の概念の違いは、(中略)今までの常識、規範、コンセプトをいったん否定するかしないかの一点にある。この点について金沢工業大学の清水博教授の著書にある定義を引用して強調しておきたい。

「創造とは、自己が自己の境界を越えて新しい自己の境界を創出することである」。

「創造とは、論理的な因果律にしたがって、現在から未来の方へ進んでいくことでは断じてな

い」。(中略)

清水教授のこの著作には、「創造の根底には、自己の境界を越えるための自己否定がある」とも記されている。

都市に関していま最も重要なのは概念を哲学的に突きつめて考えることである。都市とは何か、街とは何か、都市再生とは何か、等々。そのためにはこれまでやってきたことを全て否定する自己否定の精神が必要である。

自己否定ができない個人や組織は結局社会の荷物になって国を衰亡させる役割を演じてしまう。同書は共創について「専門家が集まり、(中略)各専門家が今までの自分が持っていた知識や技術を出しただけなのであれば、それは共創とは言えない」と述べている。「創造の根本として重要であるが、実行するのは難しい自己否定 - 今までの自分の常識をひっくり返すこと」がなければならない。そのためには、「信頼のできる仲間とホンネの議論をすること」が必要である。

そのような仲間を見出すことが、今日大変難しい。いわゆる「有識者」が多数集まって研究会や勉強会をやっても、たいていの場合は体裁のいい報告書ができるだけで、単なる時間の無駄で終わってしまう。どこかで見たような内容が散りばめられている程度の独創性のない報告書ができてしまう。とりあえずは集まる前に徹底的に自分自身で考えた者だけが集まるのがよい。そのためには、まずは各人が研究の意義を、自己否定の意義を、ホンネの意義を、理解しなければならない。同書には「創造性をストップさせる 63 の考え方」(カール・E・グレゴリー『頭脳開

発』より)が掲載されているので、その中から以下にいくつか抜粋する(ホンダで 1975 年に配布されたテキストに掲載されているとのことである)。

- ・ 理論的にはまったくそのとおりなのだよ
- ・ 実務的になれ
- ・ 君、実際やれるのかね
- ・ 委員会を作ろう
- ・ 背伸びするのは止めよう
- ・ よく考えたのかね
- ・ 君の仕事じゃない
- ・ また、いつか別の時に
- ・ 関心ないね
- ・ アカデミックすぎる
- ・ 君は自分を何だと思ってるんだ
- ・ 人手がない
- ・ 時間がない

以上の考え方は、街づくりの場において異質な人々が共創関係に入るための仕組みをつくる際に、おおいに参考になるであろう。この点は、また、いつか考えてみたい。

(2) 消える分業

人々が街で共創関係に入るためには、ホンネで自由に対等の関係で物語ができる場をつくる必要がある。その場は、必要性があってこそ生まれる。街づくりは黙っていても役所がやってくれる、建物の管理は管理会社がやってくれる、商店街の人と対話などしなくても大型店へ行けば気楽に何でも買い物ができる、自動車を使えば道々近所の人と挨拶を交す必要もない、などという街ではそのような場は消えていく。物語も消え、街も消えていく。

今このような現象が日本全国の多くの街で進行しているのではないと思われる。その根本原因は、街で人と人とがつながらなくても生きていくことができる、というところにある。それはすなわち、街の中の分業関係が希薄になっているからである。

今は街の中から人と人とのつながりがどんどん消えている。これは商業施設に関してだけではない。住宅地でもすごいスピードで人と人とのつながりが消えている。例えば一昔前であれば家の回りの掃除をするのは当たり前のことであった。だいたい早朝家の主人が仕事に出かけた後、主婦が掃除を始めていたので、そこでは自然と会話が生じていた(筆者はその光景を目にしながら仕事に出かけていた)。ところが最近ではめっきり見なくなった。マンションでは清掃は管理会社がビジネスとして黙々と行っている。コーポラティブハウスでも同じような現象が見られる。コーポラティブというくらいだから掃除くらい住人が手分けしてやるのだらうと思ったら、制服を着た管理会社の人がやっていたりする。ゴミ出しや植栽ですら管理会社がビジネスとしてやっている。玄関はオート・ロックで街に対してはコーポラティブではない。中の住人は道路で立ち話などしない(多分中の共用スペースでするのでしょう)。周辺の住民も次第に表に出なくなる、監視カメラがあったりする。街から分業が消え人が道路に出なくなれば、そこが犯罪空間になるのも時間の問題であろう。

一方、労働市場へのアクセスの問題もある。アマルティア・センが次のように指摘する発展途上国の課題は、日本の都市の課題にもなりつつあるように思われる。

市場メカニズムの占める位置をたんにそこから派生するものの意味あいだけで理解するのは誤りだろう。アダム・スミスも指摘したように、交換と取引の自由はそれ自体、人々が大切にすべき理由のある基本的自由の重要な一部なのだ。(中略)経済成長に対する市場メカニズムの貢献はもちろん重要である。しかしこの重要さは一言葉、品物、贈り物を一交換し合う自由の直接的意義が認められた後で、はじめて存在するのである。(中略)

今日の多くの発展途上国における開発の重大な課題には、開かれた労働市場へのアクセスを否定する明瞭な、あるいは暗黙の束縛から労働者を開放することが含まれる。同じように、製品市場へのアクセスの否定は、多数の中小耕作者や苦勞する生産者が伝統的な制度や制約の下で経験している困難の一つとして挙げられることが多い。経済の交換活動に参加する自由には、社会的な生活における基本的な役割があるのである。(セン前掲書)

街で人々が共創関係に入り物語を紡ぎ出すためには、街における分業関係の回復、労働機会の拡大が必要である。これが街づくりの基本課題である。都市再生にあたっては、交換の自由が市場メカニズムの重要さに先立つという前後関係を認識することが決定的に重要である。街に望ましい分業関係を創出することが目的であって、経済開発はそのための手段のひとつである。自由の拡大が目的であり経済の回復はそのための手段である。

街づくりのパワーの源泉は分業である。分業は人と人とのつながりの要であり、また倫理の要でもある。すなわち都市社会の要である。これは経済再生の要でもあり社会再生

の要でもある。その要がいま街から失われつつある。それが失われてしまえば、そこはもはや街ではなく、物語が消えた場所である。そこでは風景も消えている。

都市の風景とは長年月に渡って人々の間に堆積されてきた都市の物語である。それは都市の本質でもある。それに対して近代の都市は人々の間にではなく経済の諸機能の間に合理的、機能的につくられてきた。いまヨーロッパで魅力のある都市は合理性、機能性に屈しない物語を持っているところである。日本でも「美しい」都市をつくるのであれば、物語から始めなければならない。

ヴェネツィアは衰亡したが、あとには美しい都市が残った。それは安易な近代化を拒んだ結果である。地盤沈下で傾いた建物ですら簡単には建て替えない。道は狭く自動車は入れない。ヴェネツィアの美しさは不便が支える。物の運搬もひとつひとつを手で運ぶ。ゴミも手で収集する。そこには豊かな分業が息づいている。人手がかかるからこそ人が動き金が回り物語が生まれる。人々は仕事をし、物語をし、楽しく生きている。日本の都市も少し前まではこうだったはずだ。

(3) 大型店と街との関係

大型店はそれ自体は大変有用な施設である。規模が大きい故にできることがあり、街の人々にとっても大きな魅力のあるものである。したがってその立地を規制するだけでは何の解決にもならない。肝要なのは、大型店を街の分業関係に組み込むことである。そのためには、街の方が交渉力を持たなければならない。例えば前回述べたようなシステム形成はその力を高める手段になり得る。もっとも商店街の対応能力の現状を見るとその

実現はかなりハードである。しかし考えてみれば街にも役所というものがある。この役所が役に立たない所であるわけがない。

かつてマンション指導要綱なるものがあった、自治体がマンション建設に対してさまざまな負担を課していたが、マンションでそのようなものがあるくらいであるから、大型店指導要綱なるものもどこかにあるかもしれない。もっとも前者は自治体の負担を大きくするが後者は自治体の収入を大きくするという根本的な違いがある。しかし、自治体が自治体経営の視点ではなく街経営の視点で物事を見ているのであれば、有効な対策を講じているに違いない。あるいは昨今ではかなりユニークな特別税を創設する自治体も出てきているので、もしかするとそちらの方の検討をやっているのかもしれない。

いずれにしても大型店に負担を課し、その収入を商店街運営に回せば、商店街は情報処理体制の近代化や宅配サービスの充実など地域住民に対するきめ細かなサービスを創出することができるようになる。どこかに余っている公的資金があればそれを投入することも可能であろう。それによって高齢者や身障者、小さな子供を抱える主婦など離れた大型店まで自動車で行けない社会的弱者に対する大型店と自動車のマイナスの影響を緩和することができる。

街に社会的責任を感じている大型店であれば、街の分業形成にはおおいに協力するに違いない。例えば大型店と商店街とが共同仕入を行なう、商店街が大型店の衛星店として機能するような契約を結ぶ、地元の事業所が製造、加工した商品(例えば豆腐、野菜、肉、魚等)を大型店が仕入れる、商店街が大型店の関連サービスを担う等が考えら

れる。

もしそれがうまくいかないのであれば、全国の街が連合して大手流通企業を買収してしまうという手もある。

おわりに

今街の中では人間が発する機械的な言葉、動物的な言葉が増えている。例えば「いらっしゃいませこんにちは」、「またどうぞお越しくださいませ」という強盗が来てもきつと言うに違いない言葉がある。そのような言葉が発せられるところでは人間の動き自体がマニュアル等により外から事細かくコントロールされていたりもする。外からコントロールされる状態が長く続くと、脳が何かしようという状態が動物が本能で反応する状態に次第に近づいていくかもしれない。物語の回復はそれからの回復にも効果があるに違いない。

街の風景(4) 街のおもいで (略)